



「楽しい」という感覚

2025/3/12

No.38

岩渕和信

今回は卒業生対談。坂部広征さん(左)、室岡 恭平さん(右)(ともに湘南学園幼小中～高校卒業)に、小学校当時の「あれ」が、今の自分の幸せのもとになっている、というところを対話してもらいました。

『あさかぜ』で一緒だったよね、3、4年生のとき」

『ぞう』もいっしょだよ」

「あ、1、2年も一緒か」

ぞう組、あさかぜ組…。湘南学園小学校はクラスの名前で何期生かわかります。ここは坂部さんのお店、お蕎麦屋さんです。

「コロナの時はお客様呼べないので本当に困った。外でお弁当売って、なんとかしのいでたけど、いよいよダメ、厳しくなったときに、一人の先輩が他の先輩たちを連れてきて、寄付してくれたんだよ。そのおかげでここまでやってこれた」

「その先輩たち、深いつながりがあったってということでもないんでしょ」

「そう、湘南学園の後輩だっていうだけで助けてくれたんだよ。もう絶対に返さなきゃと思ってやってきて、やっと去年、返した。ほんと、大変だったけど、楽しかった」

「なんか、大変なことでも、『楽しめる』っていう感覚は小学校で身につけたよね。今日も会社の打合せで、大変なプロジェクトだけど、『まずは楽しくやろうよ』って話したし」

「そういえばドッジボールでも、下手な子も楽しくできるように、なんかやってたよ」

「毎年やってた民舞も、踊り覚えるの大変だったけど楽しかったよね」

『なんでそんなことやるの』って言われることあるけど、『楽しいから』って言える感覚」

「勝ち負けじゃなくて、人生そのものを楽しむっていう感覚かな」

『楽しい』ってこういうことだっていうのを知ってるというか」

「頭が『楽しい』っていう感覚を覚えてるんだ」

「そう、それ。小学校でもらった感覚だと思う」

「この感覚をもってるっていうのは幸せだね」

「そう、それがあるから、いつもリスクを負える。打算でない損ができる」



なるほど。それで、どうしてこんなサスティナブルな蕎麦屋さんになっちゃたのか、わかりました。